『戦中派 死の淵に立たされた青春とその後』　2026年1月26日

新聞記者の前田啓介氏が『戦中派 死の淵に立たされた青春とその後』を上梓している。戦中派とは、1917年～27年に生まれ、戦争の最中に青春時代を過ごし、戦争と真正面に向き合い、死を覚悟して生きた世代である。戦中派を象徴する『戦艦大和ノ最期』を著した吉田満は「われわれ戦中派世代は、青春の頂点において、『いかに死ぬか』という難問との対決を通してしか、『いかに生きるか』の課題の追求は許されなかった世代である」と、戦中派を説明している。詩人で弁護士の中村稔は、「谷川（俊太郎）の詩とか、大岡（信）の詩とかいうのはとてもね、気楽なもんだなと。…気楽な人のお遊びだって感じるわけです。…やっぱり、死の淵を覗いた人とは違うっていう」と評している。戦死者が多いのは1923年、次いで22年生まれである。前田氏は、戦中派は精神的に一度は死んで、自分ではない誰かの死を内に抱え込み、それは、死にながら戦後を生きるということであったと言う。

日中戦争は泥沼化し、兵士は遺骨となって帰ってくることが増えてきたが、本土には直接的な害が少なかったので、国民の間で緊張感は薄かった。米英との宣戦を布告した1941年の真珠湾攻撃から、戦争の危機感が一気に高まった。前田氏は、真珠湾攻撃から壮絶な敗戦までの行程を追いながら、戦中派が記した膨大な文書を読み解き、死へ強制される彼らの心情を「自己凝視と自己超克」の求道に向かったと分析している。どれほどの苦悩であっただろうか。茶道の千玄室がお茶を立てて、楽しんでいた訓練兵の一人が「生きて帰ってきたら、お前んとこの茶室で茶を飲ませてくれよ」と言った。彼は「その瞬間、ああ、もう生きて帰れへんのやと」と感じた。すると、戦後、俳優になった西村晃がすっと立って、故郷の方を見て「お母さーん」と叫んだ。他の兵士たちも同じように叫んだ。当時の若者の姿が写し出されている。彼らは何のために死ぬのかを問い、「天皇、国家のため」と教えられた答えもあるが、それに収まらない問いを抱えていたことは容易に想像できる。地獄の戦場で、紙一重で生死を分けた。戦中派は「アイツが死んで、オレが生きた」という悩ましい問の前に立たされた。「優秀なやつは皆、死んだ、できの悪いオレたちが生き残った」と自虐的に言わざるを得なかった。そこには、生き残ったことへの後ろめたさがあった。漫画家の水木しげるは「我々はこうして生きていても、戦死した者と頭の中で常に同居しています。おそらく死ぬまでそうでしょうね」と語っている。吉田満は「散華した仲間の代弁者として生き続けることによって、初めてその存在が認められる」と語っている。私の友人の山本将信牧師が、同じ教会に通っていた吉田に「後ろめたさがあるのでは」と尋ねると、涙を浮かべ「そうです、だから遊べないんです」と答えたという。

戦後の窮乏から、朝鮮戦争を機に経済は復興し始め、高度経済成長に向かった。ルソン島から生還し、ダイエーを創業した中内功が、戦死した仲間を考えると「後ろめたさを感じ、仲間の分も働こうという心境なのですよ」と語っているが、国民は豊かで、便利な生活を求めて、ひたすら働く方向に向かった。1964年に東京オリンピックが行われ、物質的な面で日本人は戦後、一番平和な充実した暮らしに辿り着いた。しかし、オリンピックが終わった後、遠藤周作は「一種の空虚感、虚脱感」を感じ、「戦後復興の目的の次に、国を前進さす目的だけは決めておくべきだった」と言っている。お国のために死ねと言っていた人が、ころっと変わって、民主主義、アメリカ万歳になった。民主主義、自由という旗、反戦平和という旗が立てられた。前田氏は、死の淵に立たされた戦中派は、旗の名称を変えただけで体質は何も変わっていないと見えたと分析している。私は、あの戦争を、東京裁判で7人に罪を負わせ、処刑して終らせ、自分たちで真摯に総括しなかったことが、復興後の目的を見出せず、全てが空しく見えた原因ではないかと思う。